

イヌの眼球結膜にみられる類皮Dermoidについての考察

誌名	日本獣医師会雑誌 = Journal of the Japan Veterinary Medical Association
ISSN	04466454
著者	大仲, 三郎 森田, 紘一
巻/号	24巻10号
掲載ページ	p. 574-574
発行年月	1971年10月

2名とともに、本考案器具による牛の授精1,200頭および獣医師2名で薬物注入のべ600余頭を実施し良好な成績を得たので臨床獣医師に本器具の使用を推奨すると同時にご批判、ご指導を賜りたい。牛の人工授精についての研究成績は日本人工授精会誌18号を参照せられたい。この器具は実用新案特許出願中(出願番号 44-015623号)

であり、農林大臣より本器具に対する製造許可(農林省指令 44 畜A第 5733 号)を得ている。

なお、新器具の考案研究にあたり多大のご指導ご援助を得ました富山県工業試験場、高岡市、高岡市獣医師会および高岡市家畜人工授精師会、仁丹テルモ株式会社に深く感謝します。

第163回日本臨床獣医学会(近畿) 期日:昭和45年8月16日 会場:神戸市 兵庫県民会館

豚萎縮性鼻炎に対する薬剤投与の効果ならびに *Bordetella bronchiseptica* の薬剤による浄化試験

須原賢治* 東 更生* 河野正行* 中村 功**

(日獣会誌 第23巻 第12号掲載)

* 三重県北勢家畜保健衛生所 ** 三重県四日市食肉衛生検査所

イヌの眼球結膜にみられる類皮腫 Dermoid についての考察

大仲三郎* 森田紘一*

類皮腫 Dermoid は先天性の疾患といわれ、正常な皮膚構造をもつ組織が、眼瞼をこえて結膜、角膜に蔓延し、米粒大乃至大豆大の半球形の比較的硬い腫瘍となり、一般的には「眼中に毛が生えている」とたまたまいわれる疾患である。

色は、淡紅色或は帯黄灰白色または、黒味をおびた黄白色にて、その表面は皮膚様外観を呈し、しばしば数本の毛を認めることがある。この Dermoid の発生により、イヌはつねに強度の刺激を受け、そのため結膜炎、角膜炎を起こすとともに、流涙、羞明がいちじるしく、ときには膿性の眼脂を呈する。また化膿性結膜炎の誘発も生じて、角膜の濁濁はもちろんのこと、ついには視力障害をもきたすといわれる。

まことに注意すべき眼疾患であるが、本症の、イヌについての詳細なる報告はあまり見当たらない。

演者らは、1969年11月より、70年1月に至る3カ月間に、健康体にもかかわらず、長期にわたって、流涙、羞明の症状を呈せる、イヌ18例について検索した結果、慢性結膜炎5例、涙囊炎3例、脂肪腫1例、類皮腫9例(結膜炎として治療を受けていたもの1例、涙囊炎として治療を受けていたもの4例、涙腺炎として治療を受けていたもの2例、計7例を含む)すなわち50%の高率に本症を発見、これを外科的切除により、すみやかに回復せしめたので報告する。

外科手術としては、全身麻酔の後、まず、2%ヒピテングルコネート液にて眼球周辺部皮膚を十分に、消毒殺

菌し、開瞼鉤にて、眼瞼を開き、確実にその腫瘍を認めたる後に、腫瘍周囲部を眼科用メスにて手術創を作り、眼科用固定鑷子にてその端をつまみあげながら、メスにて徐々に切除する。

ついで、パクレンを用いて、出血ならびに血管の新生を防ぎ、終了後、0.5%デキストロマイシンの点眼ならびに、アクロマイシン眼軟こうを注入して終わる。予後はきわめて良好である。組織的には、表層は、重層扁平上皮で被われ、それに続く皮下結合織内には、脂腺、毛囊等、皮膚付属器官の一部を保有し、さらに基底細胞層および、皮下結合織内には、メラニン色素の沈着、メラニン細胞の分布を認める。このような所見より、本症は皮膚組織にきわめて類似した形態を有するが、奇形腫のごとく三胚葉組織を欠き、全体として腫瘍の性格にも乏しいことから、類皮腫に属するものと考えられる。

以上のごとく、われわれが日常診療にあたって、この Dermoid が比較的高率にイヌに存在することに注意し、長期にわたる、または頑固な流涙、羞明を呈するイヌにはとくに嚴重なる検索が必要であろうと考えられる。

* 神戸市 開業